第 88 回麻布獣医学会　一般演題 5

産業動物乳用牛における牛伝染性鼻気管炎の発生

齋藤　陽之[1]，国吉　佐知子[1]，村田　風夕子[2]

[1] 山口県北部家保，[2] 山口県中部家保

1. はじめに

牛伝染性鼻気管炎（IBR）は，牛ヘルペスウイルス 1 型（BHV-1）の感染によって起こる呼吸器症状を主徴とする届出伝染病である。全国的に発生がみられるが，県内では 7 年ぶりに乳用牛で発生したので概要を報告する。

2. 発生状況

平成 25 年 6 月上旬，ホルスタイン種乳用牛 80 頭を飼養する農家で，約 10 頭 / 年，北海道から乳用牛を導入している。搾乳牛 51 頭の半数以上に眼結膜の充血，流涙，目やに漏出と水様性～膿性鼻汁の漏出がみられた。また，乾乳牛，子牛での発生はみられなかった。6 月 16 日にワクチン接種し，その後終息へ向かった。

3. 材料および方法

発症牛 6 頭の鼻腔ぬぐい液，血液を採材し，ウイルス学的検査（PCR 法，ウイルス分離，ペア血清を用いた抗体検査），細菌学的検査（PCR 法，直接塗抹培養）を実施した。

4. 成績

ウイルス学的検査では，PCR 法で全頭 BHV-1 遺伝子陽性，5 頭から BHV-1 が分離され，ペア血清の抗体検査では 6 頭すべてで BHV-1 抗体価の有意上昇が認められたため，IBR と診断された。

また，中和試験では BRSV で 5 頭，BPIV-3，BCV でそれぞれ 1 頭ずつ抗体価の有意な上昇がみられた。

なお，有意な細菌は分離されなかった。対策として，牛舎の緊急消毒，車両消毒の徹底，カラーコーン設置による出入り制限を実施した。未発症牛，乾乳牛，育成牛及び子牛を対象に IBR ワクチンの緊急接種を実施し，さらに近隣酪農家 2 戸でもワクチンを接種したところ，発生の拡大はみられなかった。

5. 考察

人や物によるウイルスの持ち込み，キャリアー牛による感染の可能性が考えられた。今後は飼養衛生管理の徹底を継続し，定期的なワクチン接種が必要と思われる。